

～東日本大震災からの復興～

がんばっぺいわき

平成23年3月11日 午後2時46分。
 東北地方太平洋沖を震源地とするマグニチュード9.0の大地震が発生し、それによって引き起こされた大津波が沿岸部を襲い、多数の死者・行方不明者を出す大惨事となりました。
 内陸部でも建物の崩落や土地の地盤沈下、液状化などの被害が発生。
 それに加えて原子力発電所事故による放射能汚染問題も深刻化し、多くの市民が避難を余儀なくされました。
 原子力災害によって引き起こされた風評被害は現在も拡大を続け、農業者・消費者とも不安を抱えて生活しています。
 このような状況の中、いわき市では地域や会社、農業者達が、震災からの復興や風評被害の克服を目指して様々な活動を行っています。
 その取り組みについて、ご紹介させていただきます。

JAIいわき市梨選果場で 操業が開始されております

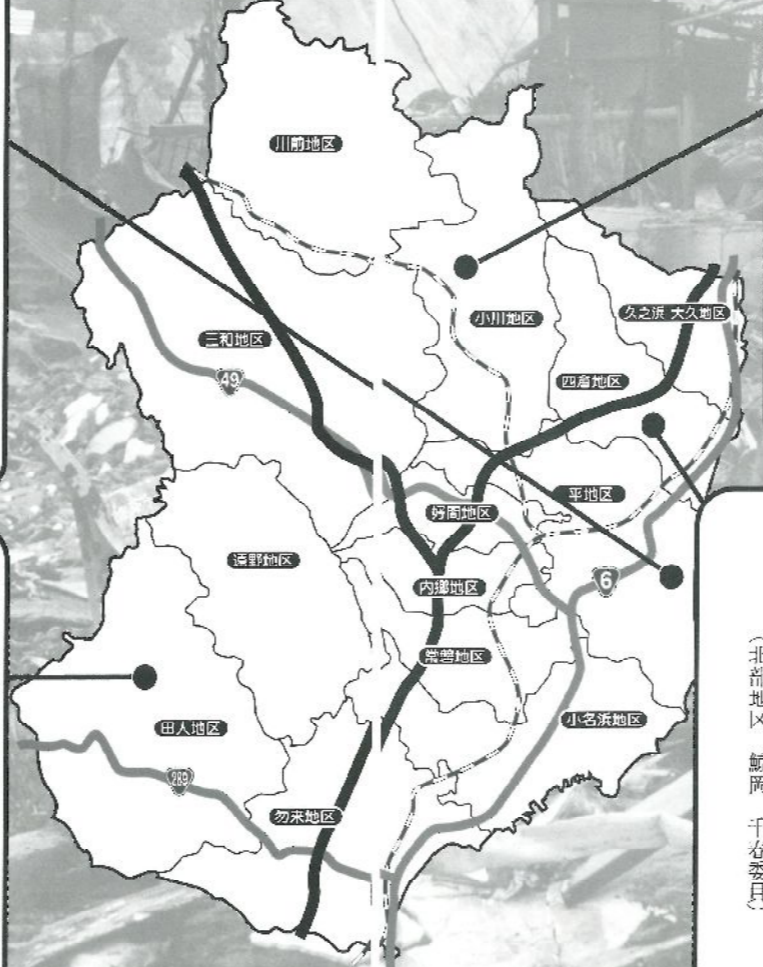
毎年この季節になると、市内のスーパーや直売所で見かける、いわきを代表する果物「サンシャインいわき梨」。皆さんも楽しみにしていたのではないのでしょうか。今年も8月22日から、小川町にあるJAIいわき市梨選果場にて操業が開始されております。
 今年は夏場の天候も良く、降水も適度であったため、肥力は良好で、糖度の高い高品質の梨を生産することができました。
 心配していた放射性物質についてですが、全支部で実施した「サンシャインいわき梨」のモニタリング調査では、放射性ヨウ素及び放射性セシウムともに検出されず、今年も、安全・安心な梨を皆さんにお届けすることができています。



9月上旬までは「辛水」、9月一杯は「豊水」、そして10月からは「新高」の出荷が始まります。
 エコファーマーである梨部会が育てた高品質の「サンシャインいわき梨」をどうぞ皆さんお召し上がりください。
 (西部地区 草野 城太郎委員)

風評被害克服に向けて とまとランドいわきの取り組み

3月11日に発生した東日本大震災により引き起こされた、原子力発電所事故。木だに取束の見通しもたえず、いわき市の農家は風評被害に苦しんでいます。農業生産法人であるとまとランドいわきも、トマトの相場が著しく下落し、5月中旬には出荷を停止せざるを得ませんでした。そのような中で、風評被害を克服し、安全なトマトを消費者に提供するために、とまとランドいわきでは様々な取り組みを行っています。
 まず、農作物の放射性物質検査ですが、県のモニタリングだけではなく、会社独自で民間の検査会社に依頼し、検査を行っています。結果は出荷基準を定め、その基準を満たした物だけを出荷し、検査結果については日社のホームページで随時公開もしています。
 また、出荷するもの全てに左下のシールを貼り付け、店頭で消費者の方々に安全性をPRしています。ラベルのデザインは、いわき市の合言葉である「がんばっぺいわき」をメインとし、背景にはフラーグールの街を連想させるハイビスカスの花を使用しました。
 シールに載せて「放射線検査済み」と表示することによって安全・安心をアピールし、今後私たちが放射能汚染問題と向き合っていくという決意を表しています。今後はこのラベルにQRコード等を入れ、パソコンや携帯電話から、放射性物質検査結果等を閲覧できるようにすることも検討しています。
 原子力発電所事故の問題から、一地元野菜を消費したいが、不当に安全か分からない。という消費者の方々は非常に多いと思います。今後は、様々な取り組みを通して消費者の皆様への判断材料となる情報を、より詳しく正確に提供できるよう、頑張っていきたいと思っております。
 (北部地区 鮎岡 千春委員)



いちごハウスの再建に向けて

平藤間 高木邦広さん

前回の「がんばる農業者」で取材させていただいた、平藤間でいちごのハウス栽培に取り組み高木邦広さん、裕子さんご夫婦。
 邦広さんは、平成20年に就農し、20アールのほ場に5棟のビニールハウスを自己資金で建て、妻の裕子さんと妹、友人の4人でいちごの栽培に取り組みしていました。就農して3年目に当たる昨年は、猛暑による高温障害や炭そ病により、多くの苗が被害に遭うなどしましたが、今年は好調な滑り出しで、2月下旬には1/3のいちごの収穫が済んでいたそうです。
 ところが、3月11日に発生した震災による津波で、ハウスは60cmの海水に冠水。高木さん夫婦が丹精込めて育てたいちごは、塩害により予定収量の2/3を残して全滅。耕運機や灌水ポンプ等の農機具も被害に遭い、出荷ビークを迎える前の悲劇となりました。

しかし、前向きな高木さんは諦めることもなく、13日にはビニールハウスの片付けと除塩作業に入りしました。出荷前だったいちごを地元避難所に80箱提供し、自分は避難もせず、ただ黙々と作業に取り組みで来た高木さん。現在は4作目の定植を9月上旬に終え、作業を進めています。今年にはビニールハウスを棟増設し、9,500株の苗を育成中です。

「今の目標は、やはり黒字経営にこぎつけることです。ね」と語ってくれた高木さん。終始穏やかで、静かな物言いの中にも、高木さんの真っ直ぐで強い意志が感じられ、いわきいちごのブランドは守り続けられていると思えました。

(東部地区 渡邊 雄委員)



▲除塩後に定植したいちご

震災の爪あとから立ち上がる

いわき市の浪野・田人地区をまたがる「井戸沢新層」。3月11日に発生したマグニチュード9.0の大地震で、4月11日の余震により断層は大きくずれ、多くの田畑に亀裂や地盤沈下などの被害をもたらしました。その被害は田畑だけでなく、道路、用水路などにも及び、多くの農業者が頭を抱える問題となっていました。
 田人町の戸ノ内地区もその一つです。平成3年にほ場整備が完了し、毎春秋になると黄金色の稲穂が田んぼ一面に広がっていました。4月11日に発生した余震により、ほ場は大きく地割れ。ほ場全域に生じた段差を見て、改めて直下型地震の大きさを実感しました。



田人町では、他にも綱木・一ノ倉・塩ノ平地区などの被害も甚大であり、中には一人をすっぽりと飲み込むような地割れが生じた水田もありました。梅雨の時期には土砂崩れも心配され、農家の皆さんは不安を募らせていたことと思います。
 そのような中でも、苦勞をしながら水田に水を入れ、地割れた農地をならしながら田植えが行われました。たくさんの方がかかりましたが、無事に収穫を迎えることができるようです。

以前のような農地に戻るまで時間がかかるでしょうが、安心して作業ができるような農地の復旧を目指し、行政と一丸となって頑張っていきたいと思っております。

(南部地区 三戸 進委員)